

## TERPNET 2015 参加報告

東京大学 生物生産工学研究センター 環境保全工学研究室 藤原 薫

2015年6月1日から5日にかけて、カナダブリティッシュコロンビア州バンクーバーにてイソプレノイドの生合成、機能、合成生物学に関する国際学会、TERPNET 2015が開催されました。今回私は公益財団法人報農会からご援助を頂き、初めての国際学会としてこのTERPNETに参加することが出来ました。報農会に深く感謝の意を表するとともに、ここにその学会から得られた経験を報告させていただきます。

TERPNETは2年に1度開催される国際学会で、イソプレノイドに関する植物、微生物、化学合成などの幅広い分野の研究者が一堂に会する機会となっております。今回の大会はブリティッシュコロンビア大学(UBC)で実施されました。口頭発表ではイソプレノイドの生合成、機能、輸送と制御系、代謝、工学技術などに関連する多岐に渡る研究が10セッション



UBCにて

に分けられ、4日間をかけて発表されました。2日目のセッションII: Biosynthesis: Central Stepsでは、以前より研究分野が非常に近いことから論文等で何度も目にしてきたReuben Peters博士の招待講演がありました。博士の講演”Divergence and convergence in (di)terpenoid metabolism from microbes to plants”ではテルペン化合物を生産する生物に広く共通して存在する環化酵素について進化学的な考察が語られ、興味深く拝聴しました。私は現在、蘇類ハイゴケの生産するモミラクトンというジテルペン化合物の生合成について研究を行っています。このモミラクトンは現在に至るまでイネとハイゴケでのみ生産されることが確認されていますが、進化的にかけ離れたこれら2種の植物で共通の化合物が生産されることに関心が持たれて

います。博士の講演で述べられた研究手法などはイネとハイゴケの酵素遺伝子を比較する際に参考になるのではないかと今後に向けて意欲が湧きました。

2,3日目にはポスターセッションが催され、多様な国の人々が英語で白熱したディスカッションを行いました。私は2日目にポスター発表を行いました。伝えたいことが十分に伝えられずもどかしい



自然豊かな構内

思いもしましたが、発表を見に来られた方々が理解しようと心を配って下さり、ぎこちないながらもディスカッションが出来たときの達成感はひとしおでした。大会全体を通して英語の聞き取りに非常に苦戦しました。一般的な英語力に加えて専門用語に精通していること、その分野の研究を理解していることの重要性を痛感しました。

学会の合間にはバンクーバー市街地に赴き、観光や食事を楽しみました。日没が 21 時近くのため、夕方から街へ行った場合でも景色が楽しめたのは幸いでした。UBC の研究室の方々と共に食事を取り、海外での研究生生活について何うことも出来ました。

今回の学会参加を通して多くの方々と接し、国際的なレベルで刺激を受けることができた貴重な体験を、今後の研究活動に生かしていく所存です。このような機会を与えていただいた報農会には改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。



カナダ・プレイス (バンクーバーのランドマーク)